
研 究 報 告

60歳以上の看護師がボランティア活動を行う意味
－日本赤十字奉仕団の活動より－

成川 美和

Meaning of Volunteer Activities for Nurses 60 Years of Age or Older
－Based on Activities of Japanese Red Cross Volunteer Groups－

Miwa Narukawa

キーワード：60歳以上の看護師、ボランティア活動、意味

key words : nurses 60 years of age or older, volunteer activities, meaning

Abstract

During my experience working with nurses aged 60 years of age or older (hereafter, nurses) in Japanese Red Cross volunteer groups, I have seen the vigor with which these nurses approach their activities and wondered what drives them to continue to enthusiastically engage in activities even at an advanced age. I therefore conducted a study with the objective of elucidating the ways in which nurses find meaning in daily volunteer activities. Semi-structured interviews were conducted on a total of five nurses in their 60s to 80s engaging in activities of Japanese Red Cross volunteer groups in the Kanto region (first aid training and emergency care at events, etc.). The analysis results showed that nurses found volunteer activities meaningful in terms of maintaining vitality, realizing a sense of responsibility as nurses, and feeling the comfort of operating under the Red Cross. At the same time, they also felt the limitations associated with age, and engaged in activities while coping with these limitations.

要旨

日本赤十字奉仕団で活動する60歳以上の看護師（以下看護師とする）と活動をともにする中で看護師の精力的な姿から、高齢期になっても生き生きと活動しているのは何故だろうかと思った。そこで、看護師が日頃のボランティア活動をどのように意味づけているのかを明らかにすることを目的に研究に取り組んだ。関東圏の日本赤十字奉仕団（救急法普及と行事等での応急救護）で活動する看護師（60歳～80歳代の合計5名）に対し半構成的面接を実施し分析した。その結果、看護師は、ボランティア活動を、生きている実感、看護師である使命感、赤十字の下で行う安心感、加齢による限界と意味づけていた。そしてそれらに折り合いをつけながら活動をしていた。

受付日：2011年4月18日 受理日：2011年11月29日

鎌倉女子大学 Kamakura Woman's University

I. はじめに

現在8割以上の高齢者が社会貢献の出来る能力を持っているといわれ、定年退職後の生き方が問われるようになった。その一つにはボランティア活動への参加があり、実際にボランティア活動をする高齢者は年々増えている。看護師のボランティア活動には、1968年に高林らの「専門職ボランティア」活動（高林, 1990）、1995年の阪神淡路大震災を機に始めた黒田らの救護活動（黒田・酒井, 2004）、新潟中越地震での高岸らの活動（高岸, 2005）、2001年から行う日本看護協会の「まちの保健室」（吉田・東・近田, 2003）がある。

研究者は、かつて日本赤十字社支部の担当職員として、現在は個人ボランティア員として日本赤十字奉仕団のボランティア活動（以下活動とする）をする看護師と関わっている。研究者は活動をとともにする中で、60歳以上の定年退職近くか退職後である看護師が生き生きと精力的に活動をしている姿をまぶしく感じ、それは活動に何か意味を見出しているからであろうと考えた。しかし、研究者はこれまでに看護師から話を聴く機会がなかった。

ボランティア活動に関する研究として、災害時の看護ボランティアや一般者による常時のボランティア活動をテーマとしたものはあるが、常時ボランティア活動をする看護師に焦点を当てたものについて国内の看護研究にはほとんど見当たらない。

II. 研究目的及び意義

本研究では、日本赤十字奉仕団に所属し活動する60歳以上の看護師（以下看護師とする）が日頃のボランティア活動をどのように意味づけているのかを明らかにすることを目的とする。それらは、看護師が行う活動における個人、社会への有用性について示唆できるものとする。

III. 研究方法

A. 研究デザイン

研究デザインは半構成的インタビューを用いた質的研究とした。

B. 研究協力者

関東圏内の日本赤十字社支部で日本赤十字奉仕団の活動をしている60歳以上の看護師5名を対象とした。その内2名は関東圏内日本赤十字社支部の担当者から紹介してもらった。3名は関東圏内日本赤十字社支部担当者から日本赤十字奉仕団委員長（看護師）を、更に奉仕団員（看護師）を紹介してもらった。

C. データ収集期間

データ収集期間は、平成18年2月～7月であった。

D. データ収集方法

インタビューガイドとして、①奉仕団に入団するきっかけ②これまでの活動で印象的なエピソード③ボランティア活動を行う意味をあらかじめ作成し、それを元に半構成的面接を1時間30分程度で行った。3名には1対1の個人面接法で実施し、2名には希望により一緒に実施した。話の内容は研究協力者の許可を得て録音とフィールドノーツにより記録し逐語録を作成した。その後、不確かな内容や追加して知りたい内容については、研究協力者に再度電話で質問をして加筆した。その他、活動に関する状況を、日本赤十字社支部の担当者及び日本赤十字奉仕団の委員長から許可を得て会報等から情報を収集した。

E. 分析方法

逐語録とフィールドノーツの記録を何度も読み返し、日頃どのような活動をし、そこからどのような意味を見出しているのかが語られている部分を抽出した。その後活動に関する会報等からの情報も加え看護師それぞれの意味づけを比較しサブカテゴリー化し、更にカテゴリー化した。

F. 倫理的配慮

日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会の承認を得た。関東圏内2箇所の赤十字社支部と担当者に、研究の趣旨を文章と口頭で説明し研究の協力の許可を得た。赤十字社支部担当者に仲介してもらい、研究協力者及び赤十字奉仕団会議の席で、研究の趣旨を書面と口頭で説明をし研究協力の依頼をした。その際赤十字社支部からの要請ではなく、研究者個人からの依頼であることを強調した。後日連絡のあった研究協力者には、研究協力による個人の不利益を生じない配慮（研究データは、研究目的のみの使用、個人が特定できない、奉仕団活動に支障をきたさない等）をする説明をし同意書2枚に署名を得た。

IV. 研究結果

A. 研究協力者の概要

研究協力者は、関東圏内の日本赤十字社支部の日本赤十字奉仕団で活動する5名であった。それぞれの背景は表1の通りである。

B. 分析結果

1. 看護師が見出している活動の意味づけ

ボランティア活動を始めたきっかけは、「先輩看護師からの誘い」「なにか社会貢献がしたかったから」「時間もあるし、出来る範囲で」というさりげないものであったが、看護師はその活動から以下に示す意味を見出していた。各カテゴリー、サブカテゴリーの構成は以下の表2に示す。

表1. 研究協力者概要一覧

研究協力者	A	B	C	D	E
年代	60	60	80	70	70
看護師経験年	30	15	40	14	25
現職の有無	有	有	無	無	無
現・最終職位	パート (医院)	常勤 (訪問看護)	師長	師長	師長
奉仕団名 (活動内容)	安全 (救急法指導/救護)	安全 (救急法指導/救護)	看護 (救護)	看護 (救護)	看護 (救護)
奉仕団員年数	10	25	14	14	10
その他社会活動	有 (デイケア)	有 (地域での奉仕)	無	無	有 (生涯教育受講)
通院の有無	有 (家族)	有 (家族)	無	有 (家族)	有 (本人・家族)

表2. 看護師がボランティア活動をする意味

カテゴリー	サブカテゴリー
生きている実感	人との交流・人の役に立つ・自己実現 心の張り・楽しい活動・自己成長・自主性
看護師である使命感	看護師としての自分を発揮 できない事への代償 一次救命の体験者としての伝言 看護学校で身に付けた精神
赤十字の下で行う安心感	大きな組織の一員・活動の補償・社会的に 名誉
加齢による限界	体力の限界・新しい事への適応の遅さ 若い指導員との隔たり

17のサブカテゴリーが抽出され、そこから【生きている実感】、【看護師である使命感】、【赤十字の下で行う安心感】、【加齢による限界】の4つのカテゴリーが見出された。

以下には、カテゴリーを構成しているサブカテゴリーを紹介し、その後各サブカテゴリー毎の分析内容とカテゴリーの分析内容を説明する。なお【 】はカテゴリー、<>はサブカテゴリー、□はインタビュー内容を示している。

a. 生きている実感

【生きている実感】は、<人との交流>、<人の役に立つ>、<自己実現>、<心の張り>、<楽しい活動>、<自己成長>、<活動の自主性>の7つのサブカテゴリーから見出された。

1) 人との交流

・人との出会いだと思ふ。いろんな人に出会えて、必ずしも、出会えた人が良かったとは思えないけど。自分にはないものをもらえる。自己満足かも知れないけど、私が行かないとみんなが心配する。「顔を見せてくれるだけでもうれしい」なんて言われると行ってるだけでいいのかな。(A氏)

・外に出て行って人と触れ合うのが好き。横のつながりがある。人が信頼してくれるうちは奉仕しようと思う。(B氏)
・担当者から「来年も来てください」と言われると嬉しい(D氏)
・高齢になっても社会と繋がっていたい。隠居はいやだという気持ち。(E氏)

高齢になるにつれ家族、友人、近所の人との交流はあっても、広く一般の人と関わることは少なく社会と疎遠になりやすい。A、B、D、E氏の活動での人間関係は、看護師が一般の人と出会い交流する中で目的の行為を行い、それに対して相手から反応をもらう相互の関係にあった。更に、他者から必要とされている自分の存在を感じ励みとなり活動をする意味となっていた。

2) 人の役に立つ

・応急処置をして病院に搬送し、一命を取り留めた体験のその時々で「適切な処置をして助けた。よかった。」と思う。(B氏)
・人様のお役に立てればとただそれだけの気持ち(C氏)
・「今日は看護師さんがいてくれたから良かった。」と言われると嬉しいし役に立ったんだな良かったと思う。(D氏)
・連日救護していて「昨日はお世話になりました」とわざわざ来てくれた人がいてね。人のため、世のためだけではないの。自分に興味があって、発見があって。社会との繋がり。喜び。良い手当ができるということ。(E氏)

B、C、D氏は人の役に立ったと喜びを感じていた。E氏は、お互い様の関係の中で自分が行った看護行為で相手がよく変化したことを確認し、自分が人の役に

立ったことに喜びを感じ意味を見出していた。

3) 自己実現

- ・人生一度しかないんだから、仕事だけが人生ではないから、仕事半分、後は自分の人生を生きようと思ってね。2、3年したら、仕事はやめて、今以上に奉仕団活動に力を入れていきたい。(A氏)
- ・おばあちゃんが来たって言われる前に潔くやめようと思うの。だから、私は育てているの。全部譲りきったときは趣味に生きる。のんびりとね。(B氏)

仕事だけに時間を使うのではなく、自分の人生を生きようと考えているA氏は、自分の時間を活動にあててきた。この先、仕事を完全にやめたら、さらに活動に力を入れていきたいと考えている。仕事を辞めるということは、ともするとネガティブに捉えがちであるが、A氏は違った。その一方で、B氏は現在の活動を次世代の育成という形に変え、全部譲りきったら、次には趣味に生きる事を考えていた。いずれも更なる自己実現をめざし今に意味を見出していた。

4) 心の張り

- ・毎日だらだらしているより緊張感がある日が週に何日かある方がいいのかも知れない。(A氏)
- ・家族が病気もちであっても、自分で率先して環境を作っているからいいと思うのね。(B氏)
- ・家族の入院中も活動に行きましたよ。考えているとストレスになっちゃう。活動することは気分転換になるわね。(E氏)

A氏は、外で活動する日が心にいい緊張感をもたせると感じ、B氏は慢性疾患の家族を介護しながらではあるが上手に調整をして活動をしている。E氏は家族の入院中も中断することなく活動を続け、活動により気分転換を図っていた。

活動によって看護師は先々に予定があり、それが目標となって、緊張感、気分転換を図ることができ、心の張りを感じ意味を見出していた。

5) 楽しい活動

- ・仕事は生活の糧。本当に余裕があればボランティアっていうのは楽しいよね。余裕というのは身体的や経済的だけではなくて精神的な事ね。(B氏)
- ・一緒に楽しみ、救護の仕事もして、あんまり楽しみ楽しみと言ってはいけないかもしれないけど。それがボランティアを続けられるこ

ともなっていると思いますよ。社会勉強になる。発見がある。おもしろいですよ。(E氏)

B、E氏は、自分に精神的なゆとりがあり、一緒に楽しみを共有でき、単におもしろいというのではなく新しい発見や社会勉強にもなっていることに満足し楽しいと思えることに意味を見出していた。

6) 自己成長

- ・指導員になった頃、何か学ぶ機会を作ったほうが良いと思って指導員仲間と「体育救護クラブ」を作ったの。もう20年ぐらい経つんだけど。自主研修をしているうちに、市民マラソン大会ができて、現場がほしくて、市民マラソンや障害者の運動会の救護にボランティアでしている。今も。(B氏)
- ・年に2回、4月の総会の時と9月ごろ研修会を開いています。自動体外式除細動器の使い方、包帯法とか三角巾の使い方、指圧の方法、救護で意識障害の人を助けた人の体験談等何回もやってきました。団員は、みんなものすごいキャリアの持ち主でしょ。(E氏)

単に出来ることをするのではなく、新たな知識や技術を習得し、自信や判断力の確かさに繋げていた。こうした自己研鑽の場を作り自己の成長を自覚することで喜びとやりがいを感じていた。

7) 活動の自主性

- ・基本は自分が出来ることを出来るときにするのがボランティアだと思う。
予定の中に入り込んでいる行事だから、何かあれば、お断りもするけど、できるだけ行くようにしている。体調でも悪くない限り受ける。(A氏)
- ・人に言われなくて、率先してやること、負担になっちゃだめよね。(B氏)
- ・最初の頃は、言われるがままに行って、与えられた救護所に詰め、待機して、誰もこなければ、「今日はゼロ。あー良かったね」と言っていた。5～6年前に出向いた救護所がかなり奥まったところにあったんです。私は、目立たないところに救護所があるなら、パトロールしようと決めました。(E氏)

各奉仕団での活動内容はだいたい決まっていたが、その場に応じて各自の判断で行う事も尊重されていた。活動後に、日本赤十字社支部の担当者として日本赤十字奉仕団に書面で報告していた。活動の特徴として、看護師が活動の依頼を受けるか否かは自由であり、活

動の場では状況に対して看護師が判断し実施すること
をある程度任されている。それが看護師の責任感を高
めることになっていた。看護師にとっては、負担に感
じず自主性を尊重されることでやる気が起き、活動を
持続する力にもなっていた。

以上7つのサブカテゴリーから、看護師は活動を通
して、共に活動をする仲間やボランティアを受ける
〈人との交流〉の中で、〈人の役に立つ〉、〈自己実
現〉、〈心の張り〉、〈楽しい活動〉、〈自己成長〉、
〈活動の自主性〉を感じ【生きていく実感】をして
いた。

b. 看護師である使命感

〈看護師としての自分を発揮〉、〈できなかった
事への代償〉、〈一時救命の体験者としての伝言〉、
〈看護学校で身につけた精神〉の4つのサブカテゴリー
から【看護師である使命感】というカテゴリーが見
出された。

1) 看護師としての自分を発揮

- ・ 幼児安全法では、子育てをしているお母さん
から質問が多くてね。今自分が仕事している
ことが参考になっていいかなと。時間の許す
限り質問を受けているんですよ。この資格が
あったからこそ仕事もボランティアもできて
いると思っていますよ。(A氏)
- ・ 救急法の指導員は、資格のない看護師でもな
いなんでもない人が教えている。看護師なの
にもたもたしてちゃいけないと思って指導
員になった。(B氏)
- ・ 出会った人には最良の処置をしたいという自
負がある。後で後悔したくないの。看護師と
いう資格が土台になっているからこういう
ことができるのでは。結局は、自分は看護師な
んだと、命に関わるんだという思い。元気で
動けるうちは自分の資格を活かして、それは
嬉しいことですよ。(E氏)

A氏は今の仕事の内容も活かして、B氏は看護師だ
からこそこの活動をという思いで、E氏は看護師であ
るという自負心が土台となって今の活動をしていると
ころがあった。誰もが20歳前後の多感な時に看護を学
びその後看護師として働くうちに看護師であることは
自分の一部となっていた。看護師は、看護師としての
自分を発揮できる事に意味を見出していた。

2) できなかった事への代償

- ・ 実家に母がいるんです。デイサービスとかで
他の施設で誰かに面倒みてもらっていて。私
は、こっちで誰かをお世話できればいいのか
など。人は誰かに助けてもらわないと生きて

- いけないでしょ。やってあげられるときはや
ってあげて、やってもらわなければいけない
時に受けられるように。(A氏)
- ・ 親とか夫の死に目に会えなかったし、それは
生涯通して悔いになっているわけですけど。
(E氏)

家族が誰かから見てもらっている分、私は誰かを看
るという思いや身内の死に目に会えなかった悔いへの
償いの思いからこの活動に意味を感じていた。

3) 一時救命の体験者としての伝言

- ・ 長男が薬湯の真っ黒な中に沈んでいたの。す
ぐ、飛び込んで救い上げ、抱きかかえ、脱衣
場のほうに連れて行った。呼吸をしていな
い。すぐに心肺蘇生をした。やっている自分
は、一向に状態の変わらない長男を見て「私
の蘇生法のやり方が違うんじゃないか」と不
安になった。一人で続けた。30分くらいして、
ふわっと呼吸をした。(B氏)
- ・ 今の看護師って何かがないと治せない。出来
ない。本当の救急法ってそんなもんじゃな
いのよね。(D氏)

B氏は看護師であり救急法の指導員でありながら我
が子に心肺蘇生した自分の手技に自信が持てなかつた
という痛烈な経験をしていた。またD氏は戦時中や戦
後の物も人も何もない時代に救急看護を行ってきた。
それらから、ボランティア活動は体験者である自分か
らの伝言であると感じ意味を見出していた。

4) 看護学校で身につけた精神

- ・ 看護学校だと思ふの。看護学校で、そこで、
ボランティア精神を教えられるじゃない。自
分のものになったんじゃないかな。(B氏)
- ・ ちょうど青春の時にね。だからちょうど吸収
する時期でしょ。何にも知らないんだから。
戦争の時にたたきこまれているでしょ。だか
ら抜けないんですよ。今は情報がすごいけど
その頃は何もないんだもの。(D氏)

B氏とD氏は、学校に行った時代背景は異なるが、
今活動に向かわせているものには共通するところがあ
った。それは困っている相手の立場に立ち支援する
という基礎看護の中で学んだ精神であった。

以上4つのサブカテゴリーから、看護師は活動に対
し〈看護師としての自分を発揮〉、〈できなかった事
への代償〉、〈一時救命の体験者としての伝言〉がで
きる場だと感じていた。看護師の根底には〈看護学校
で身につけた精神〉があり【看護師である使命感】が

看護師を活動へと向かわせていた。

c. 赤十字のもとで行う安心感

<大きな組織の一員>、<社会的に名誉>、<活動の補償>の3つのサブカテゴリーから【赤十字の下で行う安心感】が見出された。

1) 大きな組織の一員

- ・赤十字だと任せられるという安心感が相手にはある。だからそれに応えられるようにきちんとしていないと。信頼ね。そこが一番だと思う。(A氏)
- ・赤十字精神というのは、根底にありますよ。ネームバリューよね。(C氏)
- ・学生ときも赤十字の病院でも赤十字精神とは何たるかを教えられる。だから今でも、日赤が抜けない。(D氏)
- ・赤十字という組織というんですか、大きな名前前の旗の下で働くことはすごいことなんですよ。あの、赤十字関係のところまで育てられたし (E氏)

D氏は、戦時中戦後の多感な時期に身につけた赤十字精神が抜けず現在も活動をしていた。A氏、C氏、E氏は、自分が育ち社会的に認知される赤十字の組織に属し活動することに意味を見出していた。

2) 社会的に名誉

- ・赤十字で功績をたたえてもらう。お金じゃない。ちょうど15年。今年表彰してくださるそうですよ。(D氏)
- ・赤十字っていう印ってある程度認められていますよね。社会からね。赤十字のマークの下で働くということは嬉しいことではある。正直いって。(E氏)

D氏は自分の活動をたたえてもらえる事に、E氏は社会から認められている活動をしている事に名誉を感じていた。

3) 活動の補償

- ・何が起こるかかわからないからね。いくら好きでやってるといってもね。ボランティア保険はあったほうがね。安心よね。(A氏)
- ・ある程度の交通費とかいくらボランティアといっても最低限は補償しないと長続きしないと思う。赤十字みたいなバックは必要。交通費、食事。(B氏)

A氏はボランティア保険という補償があることは安心だと感じていた。B氏は最低限の補償があることで

長続きにもなると思っていた。

以上の3つのサブカテゴリーから、看護師は<大きな組織の一員>として<社会的に名誉>な活動を<活動の補償>もある事で【赤十字の下で行う安心感】となり活動に意味を見出していた。

d. 加齢による限界

【加齢による限界】は、<体力の限界>、<新しい事への適応の遅さ>、<若い指導員との隔たり>の3つのサブカテゴリーから見出された。

1) 体力の限界

- ・主任だからって全部やるんじゃない。若者に譲っていくの。全然寂しくないよ。(B氏)
- ・私達ってけっこうおばあちゃんですよ。だから「なんだこのおばあさんは」って思われるんですよ。今の問題は団員の高齢化。ちゃんとしないと奉仕団が成り立たなくなります。一番恐れることは信頼感。それはもう個人がしっかりしなければいけないと思うわけなんです。(E氏)
- ・緊張しますよ。翌日は疲れますよ。患者さんはいなくても何かあったらという緊張感がある。朝早く行くときもあるし準備もある。個人としては年間2回ぐらいだしこの年になると一日中縛られるのは疲れる。(C氏)

B氏が行う活動は、1日中動き、話すという体力を要する事も多く、そのため体力の限界を感じていた。E氏は、活動をする現在の看護師が高齢化であることに問題意識をもっている。それでも自分が出向いたときには、依頼者に信頼してもらえるようにしなければと、高齢であることを容認した上で克服策を考えて活動をしていた。

看護奉仕団では、団員の高齢化に対して定年退職後の看護師による活動を支持する一方で、新たな現役看護師の団員確保について検討をしている。また、支部では、長年協力してきた救急法等の指導員でその功績を認めた者については、直接的な講習会を行うのではなく、支部の要請によって指導の技術や資質向上に協力してもらうような規則を定めて対応している。

看護師は、活動内容と自分の心身の状態に折り合いをつけながら活動をしていた。

2) 新しい事への適応の遅さ

- ・10年の間には、団の規約が改正され、慣れたやり方が身につけてしまっていてついていけないと感じることもある (C・D氏)
- ・今は、赤十字出身ばかりではない。人数が集まらないので看護婦の免許を有する人なら誰でもいい。やっぱりちょっと違和感がある。

どっか違う。おかしいわね。(D氏)

C氏とD氏は、奉仕団の規約が改正されたり新しい奉仕団員が入り雰囲気が変わった事に対してすぐに馴染めず新しい事への適応の遅さを感じていた。

3) 若い指導員との隔たり

- ・50歳の頃救護活動の中で、そのころ70歳以上の先輩看護婦の処置の仕方がおかしくて「それでは怪我によくはないのでは」と思った。今自分がだんだん歳いくでしょ。主任だからやるのではなく、やらしてっ感じています。大事だと思うの。難しいよね。だんだんにね。相手を認めて、機会を見て一歩下がりながら言う。(B氏)
- ・私達同世代は昔を懐かしむのは楽しい。でも一緒にいる若い団員は救護にいった先でこんな昔話聞かされてもわからないし関係ないでしょ。(D氏)

B氏は、若い時に出会った先輩看護師に隔たりを感じていた。自分が先輩側になり人間関係を円滑にすることで歩み寄れているものの隔たりは感じていた。D氏は新しく入団する若い団員との間に世代の違いを感じていた。

以上3つのカテゴリから、看護師は活動をする中で、高齢が故の<体力の限界>を感じ、どんな行事にも対応できるわけではないと思っていた。また、かつての方法が身につけており、規約の改正、新しい内容の追加、伝達方法の変更に対して<新しい事への適応の遅さ>や<若い指導員との隔たり>も感じていた。それらは団員同士が互いを理解しあい尊重する気持ちを持つ事で補っていた。

V. 考察

A. 活動がもたらす看護師への有用性

1. 生きがい

加齢と共に身体的、社会的に喪失する出来事や精神的な喪失感を感じることの多い高齢者にとって、生きがいがある事は重要な事である。

田中(1994)は、高齢期の生きがいのキーワードとして「さみしさ」を挙げ、そのさみしさの克服手段として自我の確立だと言い、そのためには、「自分以外の人、物に影響し、社会的に有用な役割を果たし、その結果として喜ばれ、感謝される活動をする事だ」(p.38)と述べている。

以上の点から、【生きている実感】をすることは、生きがいにも通じる重要な感情であるといえる。

2. ボランティア活動に向かわせる力

Nightingale(1860/1983)は、「看護婦は、自分の仕事に使命感をもつべきである。」(p.220)と述べ、これは高い信念を達成することだと説明している。この言葉通り看護師としての強い信念が長年の仕事の中で培われ【看護師である使命感】を抱き活動に向かわせる力となっているといえよう。

3. 社会の中で所属して生きていくということ

【赤十字の下で行う安心感】については、2つの要素が含まれている。1つには、看護ボランティアという同じ目的をもった組織の一員として活動することで、マズローの基本的欲求の第3段階である帰属欲求が満たされることである。もう1つには、看護師の内4名は、赤十字の看護学校の出身者で「赤十字がしみついている」「赤十字の旗の下で働けることは喜び」「赤十字から表彰されることは名誉なこと」と述べていたことから、赤十字で活動することがより精神的な拠所となっていることである。看護師にとって看護師を活かしたこの活動は、第二の人生を豊かに生きる方法の一つであるといえる。

研究者は、看護師が、ボランティア活動を定年退職後の人生において永遠的なものではなく人生の通過点であり更なるこの先の将来を見据えている事に驚き、生きるということの力強さを教えられた気がした。

B. 活動がもたらす社会への有用性

高林(1990)との対談の中で、川島は、「専門職ボランティアには、専門職がもつ機能を地域に還元することのよさを主張することが求められている」(p.166)と述べている。

平山(1995)は、「老人の存在に意味がある」(p.179)と価値付け「知識や技術や英知を次世代に伝達し、社会の存続と公正な社会秩序の構築に寄与する」(p.184)と述べ、小林(1989)は、「高齢者の智恵、伝統、歴史的体験、生き様の美しさ、高齢がゆえの自由な発想をいかすべき」(p.194)と述べている。そして田中(1994)は「高齢者が何らかの社会活動を行うことで、有償であっても人権費の削減になる」(p.19)と経済効果があることを主張している。

インタビューの中で語られた「戦時救護の体験」や「わが子への蘇生体験」「常に仕事と家庭に揺れながら生きてきた女性ならではの生き様」は、人生の深さ、重み、尊さを感じた。それは看護師のパーソナリティーとなって、活動の中に活かされていると感じた。この活動は、高齢者の智恵、伝統、歴史的体験、生き様の美しさが活かされているといえる。

今後も日本赤十字奉仕団が、定年退職後に活躍でき、個人のやる気を引き出す場であり続け実績を作ること、高齢者活動システムの先駆的モデルとなり、社会のシステムの構築に寄与できるのではないかと考える。

C. 本研究の限界と今後の課題

本研究は、看護師数が少なく、一般化までには至らないところに限界がある。今後の課題は、活動する看護師の数多くの語りから探求していくことにある。

VI. 結論

看護師は、ボランティア活動を、生きている実感、看護師である使命感、赤十字の下で行う安心感、加齢による限界と意味づけ活動をしていた。

謝辞

本研究にご協力くださいました日本赤十字社支部、担当職員の方々、資料の提供をいただきました赤十字本社ご担当の方々、インタビューにご協力くださいました奉仕団員の皆様、そして日本赤十字看護大学老人看護学川嶋みどり教授はじめ多くの老年看護学教員の方々に深く感謝を申し上げます。本論文は日本赤十字看護大学大学院修士課程に提出した修士論文の一部に加筆修正したものである。また、本研究の一部を第9回日本赤十字看護学会学術集会で発表した。

文献

- 平山正実 (1995). 第5章ライフサイクルからみた老いの実相. 南博文編, 生涯発達心理学5 老いることの意味 (pp.152-188). 東京: 金子書房.
- 黒田裕子・酒井明子 (2004). 災害看護 人間の生命と生活を守る. 大阪: メディカ出版.
- 小林司 (1989). 「生きがい」とは何か. 東京: 日本放送出版協会.
- Nightingale, F (1860) / 湯楨ます・薄井担子・小玉香津子他 (1983). 看護覚え書 (第4版). 東京: 現代社.
- 高岸寿美 (2005). 新潟中越地震における日本赤十字社の心のケア活動. 看護管理, 15 (4), 314-317.
- 高林澄子 (1990). 専門職ボランティアの可能性と課題. 東京: 勁草書房.
- 田中尚輝 (1994). 高齢化時代のボランティア. 東京: 岩波書店.
- 吉田明子・東ますみ・近田敬子 (2003). 地域における看護活動の必要性とその課題-「まちの保健室」で活動しているボランティア看護師に対する調査から-. 兵庫県立看護大学附置研究所推進センター研究報告書, 1, 27-31.